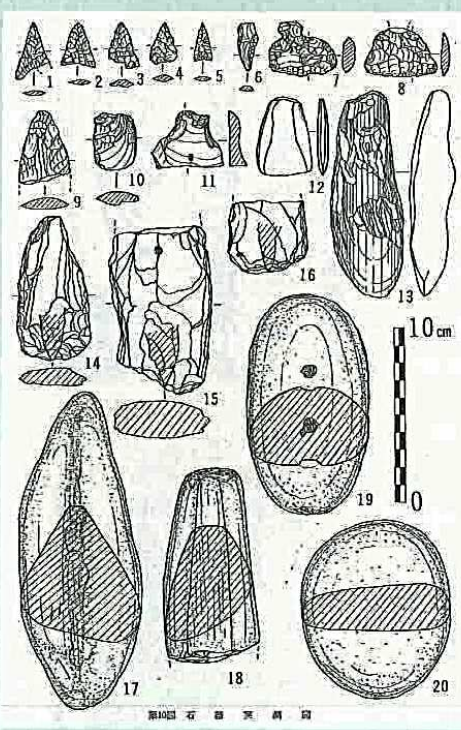


もっと知りたい  
ふるさと

46 私の新しい故郷「大田原」

大田原は、標高760m、現在、千曲市で最も高いところにある集落です。そして森地区の標高900mの沢山川水源に見られる沢山遺跡と共に1万年以前の洪積世（現在の呼び名は更新世）に、旧石器時代の人々が生活していた千曲市で最も古い悠久の時代の痕跡が残されている地域でもあります。

大田原は洪積世の活発な火山活動により谷がせき止められ、現在田圃になっている地帯は湖沼をなしていました。その湖底には周囲から流れ込んだ粘土質が厚く堆積して、その粘土層の中には埋もれ木が立っているといわれています。



池尻遺跡 発掘石器

この湖沼を囲むように旧石器時代から縄文時代をへて、弥生時代、奈良、平安期までの上日向古窯群・向山古窯、いちご遺跡・大門遺跡・下日向遺跡・峠遺跡・佐野山遺跡・大久保遺跡・池尻遺跡が点々と発見されています。その1つである池尻遺跡の発掘調査ではリング箱2つほどの石器・土器が集まり、それには縄文早期・前期から中期・晩期までの各時期の形、文様の特徴を持つものがあり、縄文各期を通じて人々の生活を育む豊かな自然があったことを示しています。

文献による大田原の歴史は鎌倉初期から始まります。「松林家文書」「田原神社文書」等

によれば、寛喜3年(1231)京都東伏見から関白藤原基通の次男松林大城守親信(藤原親信)主従9人が摂関家との土地争いに敗れ落居。生活に困り、うち7人がやむなく罪をおかし切腹、残った親信、右近父子が大田原を開墾したと記されています。この7人を祀った「七人塚」があり、現在でも祭りが行われています。松林親信が開郷した村だということですが、現在でも松林姓が7割、津・宮本・丸山姓が1割、数割ずつです。藤原氏が「松林」の姓を名乗ったのは、京都東伏見の屋敷に松が多く生えていたからとも、將軍家から松林監守の役をお任せつかったからとも書かれています。

この大田原開郷譚を検証してみました。藤原氏の系図によると、藤原基通(近衛家)の次男の名は道経であり、親信ではありません。長男Ⅱ家実・三男Ⅱ兼基(鷹司家)・四男Ⅱ基教で「親信」は出てきません。庶子の可能性は考えられません。藤原氏と源氏に詳しい系図「尊卑分脈」には、「藤原親信」は5人出てきます



「日向」地区に祀られている七人塚

が、いずれも時代が合いません。「大城守親信」の素性はいまだ確認できていません。「松林」姓については、東名高速道京都南ICの南、伏見区に「松林町」があり、この点では符合します。当時は近くに鳥羽離宮があり、公家の屋敷が並んでいたとは現地図書館職員の話です。寛喜2、3年は天候不順、鎌倉期を通じて最大の飢饉で「天下の人種三分の一失す」と記録にあり、信州への落居の理由はこの辺りにありそうです。

東京の墨田区・吉祥寺・国分寺・立川・昭島とあわただしく住居を替え、「故郷」と言える場を持たない私が、風に舞うタンポポの綿毛のようにして舞い降りた大田原に住んで16年、自然と親しみ、地域の来し方を知り、人々と織りなす人生を過ごして、故郷を得た思いです。

桑原大田原 幸野 耿